

図書館通信



特集 ～読んでから見る？見てから読む？～



「読んでから見るか、見てから読むか」は、森村誠一原作の小説『人間の証明』（角川書店）が、映画化された時のキャッチコピーとして有名です。小説が原作の映画やドラマが多く公開されていますが、夏目漱石の『坊っちゃん』のように有名な文学作品が映画化される場合もあれば、映画が話題になった後、原作小説が注目される場合もあります。そこで、附属図書館利用者（学生・教職員・一般）100人に、映画・ドラマ化された本は、原作を先に読む派か？映画を見た後読む派か？当てはまる場所にシールを貼ってもらいました。結果は次のとおりです・・・



読んでから見る？見てから読む？100人に聞きました！

読むだけ ← 読んでから見る

見てから読む → 見るだけ



読んでから見る

19人

読むだけ

6人



見てから読む

34人

見るだけ

27人

どちらともいえない 14人

※アンケート協力
附属図書館利用者

100人

見てから読む派が1番多いようです。見るだけの方が27人でしたが、73人の人は、タイミングは違えども本を読んでいるようですね。

利用者のつぶやきから・・・

- ・見るのが先。先に読んでから見て、イメージしたものと違っていたら、がっかりするから。
- ・ものによる。どちらかというとなんでからが多いかな。
- ・見るだけ。ハリーポッターはおもしろかった。小説も読んだが、場面が想像しにくかった。
- ・読むだけ。映画は別物として見る。シェークスピアのような古典をどう映画化したか気になるものは見る。
- ・音楽なら絶対楽譜が先で聴くのは後だけど、映画は手っ取り早いから話題の作品はとりあえず見るのが先。
- ・携帯小説を読むのが好き。毎日更新されて読むのがいい。単行本になったり、映像化されたら見ない。

VR ブームの立役者となった「安価な技術」

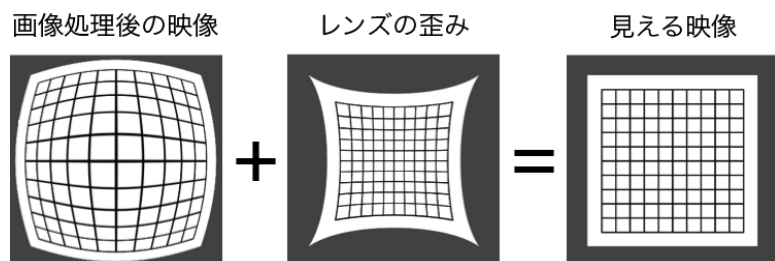
2016 年は VR 元年とされているが、VR の流行のけん引役となったのは、Oculus 社の開発者版としてリリースされたヘッドマウントディスプレイである、Oculus Rift Development Kit1（通称 DK1）であり、2012 年 8 月 1 日から KickStarter から出資者の募集が始まったことがきっかけであった。

当時ヘッドマウントディスプレイは民生品で安くとも Sony の HMZ-T1 で 59,800 円、HMZ-T2 で 69,800 円、ただし映像を見るだけのものであり、VR デバイスとは呼べなかった。業務用や研究用のヘッドマウントディスプレイには視線追従をするための別の測定装置が必要で、少なくとも 100 万円～200 万円、コンピュータやソフト開発環境を含めば 500 万円～1000 万円はかかっていたと考えられる。

実際に視線の追従が行えるようになったのは Development Kit2（通称 DK2）だが、こちらも\$350+送料(当時は 4 万円～5 万円相当)となり、文字通り価格破壊が起きた。なぜここまで安くなったかは、創始者がスマートフォン技術と画像処理技術に目をつけ、徹底的に価格を抑えて製造できる方法を考案したことにある。



Oculus Rift Development Kit 2



画像処理とレンズ歪みの合成

当時、光学主体の映像技術は、「映像に歪みを出さないようにレンズを調整すること」を主においていたので、特殊なレンズや複数枚のレンズを構成する必要があった。Oculus ではその前提条件を壊し、「レンズの歪みに合わせて、歪みを打ち消すように画像処理を行う」方針で、レンズは両目で 2 枚（画像左下）のみ使われた。さらに、スマートフォン用のディスプレイ（Samsung 社のもの）や安くて高性能なジャイロセンサを利用するなど、一から開発するのではなく、安価に使えるものほとにかく利用するという方針で開発が進んだ。

ソフトウェアの開発でも、個人でも開発ができる環境を提供した。業務用のゲーム開発ソフトで定評のあった Unity、Unreal Engine 4 が無料でソフトを提供したことも契機となり、すべて一から揃えても 20 円万～50 万円の範囲で、VR のゲームやコンテンツが作れるようになった。

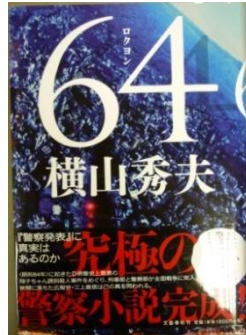
これらの一連の動きは、「いかに技術を駆使して VR デバイスを安く作れるか」にシフトしていき、Leap Motion 社のハンドジェスチャ認識デバイスや、Microsoft 社の Kinect など個人で買えるデバイスが注目され、今後もこの流れは続いていくだろう。

新着図書

今号の特集、「見てから読む？読んでから見る？」にちなんで、新着図書の中から今年映画化予定の作品を紹介します。この他にも附属図書館には、映画化・ドラマ化された原作本が多数あります。古典から新作まで原作の世界を楽しんでみませんか？



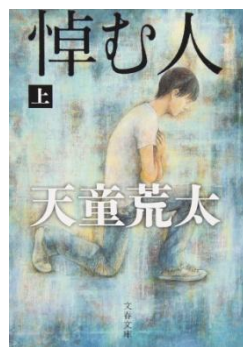
『少女』 湊かなえ著
早川書房 請求記号 913.6/MI



『64』 横山秀夫著
文藝春秋 請求記号 913.6/YO



『ファミレス』 重松清著
日本経済新聞出版社 913.6/SH



『悼む人』上・下 天童荒太著
文春文庫 請求記号 913.6/TE



『植物図鑑』 有川浩著
角川書店 請求記号 913.6/AR

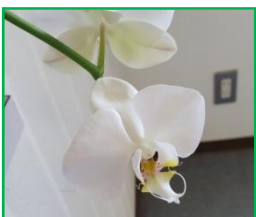
～開館時間のお知らせ～

月曜日～金曜日 9:00～17:00

土曜日 9:00～12:00

臨時に開館日・開館時間を変更する場合は、その都度掲示でお知らせいたします。

編集後記



～3年ぶりに咲いた
閲覧室の花～

3年前、退職する職員から附属図書館に一鉢の植物を託されました。進物として贈られてきたものらしいのですが花の姿はもうありません。しかし青緑の葉は艶やかで大事に世話をされていたことがわかります。引き継いで、花など期待せず、観葉植物として水やりだけの世話をしてきました。それがなんと、この春つぼみをつけ、左の写真のような美しい花をさせたのです。また花を咲かせようと3年間準備をし、いざこの時とばかりに窓の光を求め、枝を伸ばす姿は生命力に溢れています。利用者の方々にとっても、附属図書館が花を咲かせる準備の場になればよいなあ、と改めて感じた出来事でした。

今号にご寄稿くださった松原先生、シールアンケートにご協力くださった皆様、ご協力ありがとうございました。 (F)